

9〜10月に韓国・仁川で行われたアジア大会で、ソフトボール日本代表が大会4連覇を達成した。8月の世界選手権優勝に続く快挙で、選手団チームリーダーとして帯同した私も歓喜の輪に加わった。

決勝戦終了後、各国の選手がグラウンドに集まって掲げたのは「Baseball & Softball Let's do it together 2020」の垂れ幕。現在は五輪種目から外れている野球とソフトボールを、20年東京五輪から競技復帰させるアピール活動の一環だ。国際オリンピック委員会（IOC）の委員たちにも、関係者の思いが届いてくれればうれしい。

大会では、教え子の上野由岐子（ルネサスエレクトロニクス高崎）の成長ぶりに頼もしさを感じた。押しも押されぬせぬ日本の大エースだが、

人を育てる

ソフトボール元日本代表監督、NPO法人「ソフトボール・ドリーム」理事長

宇津木 妙子

* 毎週日曜日掲載



アジア競技大会で4連覇を果たしたソフトボール日本代表。決勝戦後、各国の選手とともに、2020年東京五輪で公式競技復帰を求める垂れ幕を掲げて記念撮影した



後輩やチーム全体のことにも気を配り、背中で導こうとする「責任感」も芽生えてきたように思う。

点差が開いたある試合で、好投している上野が「若い子に国際試合の緊張感を味わわせたい」と交代を申し出たことがあった。以前の上野なら、気持ちの強さばかりが前に出てしまい、「自分が最後までマウンドを守ってチームを勝

たせるんだ」と譲らなかつたと思う。彼女ももう32歳。「上野も成長したな。後輩を育てようとしてくれてるんだな」とうれしく思った。

人を育てるのは本当に難しい。特に、若い子たちへの接し方は年々難しくなっているように感じている。

アジア大会では、36競技、439種目が行われ、日本の各競技団体が精銳を送り込んだ。ただ、態度や服装、振る舞いなどが未熟な若手選手も目につき、「勘違いしているな。国を背負っている自覚が少し足りないな」と残念に思うケースもあった。

近年のスポーツ界には「勝つ者こそ偉い」「勝てば何をやってもいい」という風潮を感じる。指導者も結果を求められ、上手な選手を甘やかし、もてはやするようなきらいもある。でも、それは絶対に間違っていると言いたい。こつこつと練習を積み重ねる大切さ、チームプレーの素晴らしさなど、スポーツを通して学べることは山ほどあるのだから、

指導者は根気よくそれを教えていかないといけない。

昨今は体罰問題もあり、指導する側も悩みが尽きないようだ。それでも、ひるまずに「良いものは良い、悪いものは悪い」という分別くらいはちゃんと教えてあげないと、それは本当の愛情とは言えないだろう。大会中、競泳代表選手によるカメラの窃盗という残念な出来事もあったが、こうした現状が遠因になっているのかもしれない。

長く率いたルネサスの選手には、とりわけ厳しく教えてきたつもりだ。日本代表選手も多いチームなので、「国際大会ではうちの選手が率先して行動しないとイケないよ」と口を酸っぱくして伝えてきた。今回の世界選手権、アジア大会でも、ソフトボールの代表選手たちは、周囲へのあいさつや、グラウンドのゴミ拾いなどを欠かさずやってくれた。ソフトボール界に根付くすばらしい伝統を、若い世代にしっかりと受け継いでいってほしい。